

海岸の故に成育旺盛、つややかに葉の光っている潤葉樹の老木がすき間なく密林となり、参道をはさむようにして見事な松並木が空高く聳え、小鳥が多く、時には名も知らぬ怪鳥が叫び交わし、廣くは廣く、私は県南第一の社叢としてマークしていた。今は見る影もない。これ全くセメント会社が出す粉塵のせいで葉である。

昨年は公害に明け、公害で暮れた年であつたと言われた。然しそれはそのまま今年に引き継がれて格好である。今私は興人とセメント会社に關する公害をとり上げなが、この種産業公害はその企業の種類大小にかゝりなく、大なり小なり必ず伴つてゐるといふ。つまり繁榮に伴う必然的なけがりである。交通公害も整視出来な。騒音、振動、排氣ガス、そして交通事故が虎視眈々と我らの生命までねらつてゐる。これは何とかしなくてはならない。

梅の便りなどささやかれる昨今、窓から見る遠い山は、いす紫にかすみ、あさこ七の山裾、谷間の杉は、霜に葉が焼けて美しい彩りをそえてゐる。早春である。

早春の番正川の風物詩に、前におけた白魚と共にな、命一つ、青海苔とかがある。餅祭と共に十数隻の小船が長瀬橋の上下に、入り交れて長い棹をつかい、長く伸びた海台を争うようになつた。大娘張に言えは壇、浦合戦のようである。通勤の途中自転車ととめて欄干から見ると、どうも今年はその海苔のつきがわるいようである。

この長瀬橋のおたりでは、年中通じて蛭(しじみ)がとれる。春から夏にかけては汐さえよければ毎日何十人もの賑わいがあるが、この頃の寒さでもほつてゐる。公害でこの蛭もとれなくなる日が来るのではあるまいか。

白魚が全くとれなくなつた。且らば釣れるが臭いとい

う。去年の秋は蟹(はたけ)が釣れなかつたとも言う。子供達は水泳も出来な。且つて園水田独歩が、四周の山並と共にその美しい姿をたえた番並の流れ、これらに象徴されてゐる佐伯の美しい自然はどうかであるか。薔々と上げぬ城山、山際通り、静かなたすまい、城下町の面影を今もとどめてゐる門や塀や寒竹垣、思いがけないような斬角下姿を見せてゐる古井戸。またまた市中にも百年前の歴史が残つてゐる。どうかしてこれらは守りつづけて。

やがて咲く庭先の梅に、今年も鶯や目白が来てくれるであらうか。野道を歩いてひたきの姿を見たり、揚雲雀の声に春の近づいたことを知りた。菜の花が咲き蝶が舞い、蜜が甍にとび交ひ、蟬時雨が頑童たちを誘ひ、我空は高く蟻が流れる——これを老人の御愁と片付け給うな。楽しかつた佐伯の自然は、時の勢いによつてどん／＼こぼされてゐる。放つておいてよいものであらうか。

公害追放佐伯市民会議の席に、私は佐伯史談会の代表と名の左形で数度招かれた。この会議は決して各種団体代表者だけのものではな。それは全市民(南郡も含めて)皆のものであり、従つて一人一人の問題でもある。「国破れて山河あり」という言葉があるが、美しかるべき山河が汚れて何があろう、ついこの間「城山の松、馬場の松」を完全に失つたように、緑の山河を失つて我らは何によつて生きる喜びを得ることが出来よう。

我らは歴史ある佐伯の美しい山並、野を、川を、海を守らうではないか。監視し、警告し、保護し、主張しようではないか。我らの御上は我らの手で守らう。心を傾けて努力してほしいと希望するものである。

研究

愛宕信仰と佐伯氏の関連

―古市愛宕神社境内を調査して―

会員 佐 脇 賢 一
(佐伯市津志河内区)

一月二十三日、私は鶴岡地区古市の^{久保}地にある愛宕神社境内の調査をした。それは佐伯市教委の加藤健一会員が取扱した、同神社本殿の柱石に使用している台石が、宝塔の一部であることから、若くはしたる境内から古塔墓類の発見があるのではないかと調査したのであるが、この日は新夫を発見はなかつた。

しかし榊礼城下古市の地形から、愛宕神社所在地である^{久保}地一帯が佐伯氏の居館あるいは一族臣僚の邸宅地として格好の土地であり、とくに神社境内が本殿祭祀の大岩を中軸に、人力で掘鑿開拓されたことが容易に想像されるため、城砦または居館の遺址として全体的な形状を調べることにになり、小野英治会員らが全域の測量をした。

と云ふで問題はこの愛宕神社で、現在の社殿は明治中期の再建だが、伝承では大永元年(一五二一年)佐伯惟治が創祀したことになる。増村隆也氏の佐伯郷土史によれば惟治創祀の神社は大永元年の愛宕神社をトツプに、大永五年の上野山王社、切畑一宮明神、上野二宮明神、大永七年の切畑祇園社となつており、郷土史の基本的史料である大友興廢記や榊礼実録は、惟治創祀の社として追田の祖母嶽明神をはじめ上野の妙見社、切畑の祇園社、上野の白山権現、切畑の一之宮、上野の二之宮、中野の本宮社をあげ、再建祠として戸塚の大宮八幡宮、下

野の菱之宮(星宮)、宮の内之宮(三社権現)をあげている。

榊礼実録はいわば惟治伝説を中心とした軍記風物語で、その前篇「剣の巻」は大友興廢記の抜萃からなつてゐる。その意味では大友興廢記をタネ本にした物語作家の創作というようなものだが、土着文化人の手になるものだけに土臭いながらも伝承に忠実である。実録がまず取上げてゐる惟治の祭祀伝承は、古弥直左京亮定盛による祖母嶽大明神の勧請で、祖神と崇める祖母嶽大明神の社殿は、怒廟の神靈、一國一城の鎮守と記されているようにすこぶる荘嚴なものであつたらしい。その社殿は榊礼城より南西の間、^{山田}田(追田)の地に建立されたといふが、同神社に関する記録は巨かになく、明治維新ごろまでは^短短冊明神と伝える神社が追田(現在の^{八戸}八戸)にあつたといわれる。いまは本殿の一部が八戸の今徳神社に残り、神祠は上岡の十三重塔背後の丘上に存置してゐる。

^{久保}地のある愛宕神社は大永元年創祀と伝えられてゐる。佐伯地方にはほかに上野村(現弥生町)宮ノ河内、下野村(佐伯市内)八戸、大坂本村(弥生町)畑、堅田村久部、国尾村尾形、中野村宇津々、上浦所蒲戸などに愛宕社があるが、尺間神社の新宮として創始された大坂本村の愛宕社以外は、はつきりした創祀伝承をもたない。

榊礼実録の惟治伝説はいわゆる春好の魔法説話および榊礼合戦と惟治の生涯で構成されてゐるが、春好魔法の説話は戦国末期の時代相を反映した憑依信仰の具象化であり、飯綱の法、愛宕の法といわれた巫呪術信仰の説話である。惟治が愛宕神の社をその領内に数カ所創祀したとすれば、彼が春好に帰依していたことの証明となり、春好魔法の実体が何であつたか明瞭になる。尺間(兼藤)神社は社伝によると、天正元年(一五七三年)

佐伯惟教の旧臣高司治郎右衛門こと田賀志盛雲法印が大峰入山の修業成り、郷里に帰つて寂庵の山を聞き、山中に祭祀されていた愛宕神に奉祀したことにほじまり、盛法印の徳をしたう村人たちが、慶長元年六月、尺間の神を山麓に迎えて奉祠したのが植松の愛宕神社であるといふ。鶴藩略史による。

尺間神祠は軒遇突智命、経津主命、武甕槌命と祀る。大坂本村に属し、山イ高さ千百十尺。初め養老年間に詣で徹宵黙禱す。夢に人あり、告げて曰く、余應に汝の郷里尺間山麓に垂跡せんと。賞めて之を奇とし、乃ち慕を抜き徑を作り、祠を建て之を祀り、尺間権現と号す。

とあつて尺間の開創は養老年間(一七一七)で、村長御鱗治右衛門が愛宕神を信仰し、神の示教によつて尺間山を聞いたことになつてゐる。御鱗も高司もこの地域の土豪の姓氏である。尺間の濫觴を何処に求めるにしても愛宕神の信仰という一事には変わりはない。

それでは愛宕神とは何者か。神道説では軒遇突智神であるが、俗信として樺木(いちき)地蔵の信仰と合致してゐる。林道春の『本朝神社考』による。

王城の西の山を愛宕山と名づく、嵯峨万仞の上に秀出す。実に靈区なり。昔文武の大宝中に彼の小角此山に上らんと欲す。雲遍上人といふ者あり、嵯峨の奥に住庵す。小角同じく行いて清龍にいたる。滝の上に雲起り、山下に雷鳴る。雨の降ること律軸の如くにして進べからず。二人秘呪密言以て祈禳す。日俄にして天晴る、しばらくありて地蔵、黄樹、富楼耶、毘沙門光をその上に放つ。或は愛染を加えて五佛といふ。大杉あり、天に張り地に蟠る。天竺の

大夫日良、唐の大夫善思、日本の木郎房、各々其の眷族を將いて大杉の上に現す。九億四万余の天狗あり、神頭鬼面、披毛戴角、二人に供けて曰く、我ら前二千年、靈山会の上に佛の附屬をうけ大魔王となりて此山を領し、群生を利益すと。言訖つて見えず。

二人因つて杉樹を号して清龍四所明神となす。これは愛宕山の縁起で、ここに修験の道場を開いたのは真濟上人、同所は真言密教の行場であつた。真濟は醍醐臣御園の子、弘法大師の弟子と伝えられてゐる。貞觀二年(八六〇年)二月歿、年六十一才。その靈は大天狗となり愛宕の太郎坊といつた。

そこで問題は弘法大師つまり空海が唐から帰國したのが大同元年(八六〇年)八月で、京洛の東寺を道場として教王護國寺にのりたのが弘仁十四年(八三三年)、また空海が歿したのは承和二年(八三五年)で、真濟が愛宕山に入つたのは承和年間(八三四—八四七年)と見られてゐることである。愛宕山の信仰が火の神軒遇突智神と結びついたのであるが、それははつきりしないが、真濟上人によつて修法されたとはいふ。勝軍地蔵の法に關連することはたしかである。もともと愛宕神は丹波國桑田郡の阿多古神社にまつられていた神靈で、軒遇突智神、若宮雷神(賀茂の神)、破无神を祭神としたが、洛外鷲峰に移祀されることになつてから道祖神として地蔵信仰が附加し、軍神として祀られた際軍不動に刺つて勝軍地蔵が祀られ、愛宕神の本

地とされた。かくて京洛士民の生活を守る火防の神となり、愛宕大権現が創造された。愛宕信仰は貞觀年代(八五九—八七七年)にはじまつたもので、尺間祭祀の養老年間(八五九)は愛宕信仰の史実からは年代的にちがうが、愛宕伝承をミツクスしたものと見えるだろう。真濟が愛宕の太郎房といふ天狗にまつたのは、真濟の伝承か。

ら修験行者と天狗の因縁が結ばれるが、佛教では天狗と
は神通力をもち、天界を飛翔して佛法の妨害をする怪物
のことであり、中国では彗星または流星を天狗といつて
いる。わか国は天狗は人間に似て鼻が高く、羽があつて
頭上に五角形のいあゆる天狗の兜巾をいだかいている。
大天狗といわれる首領株の天狗日鞍馬山の僧正坊、愛宕
山の太郎坊、比叡山の次郎坊、飯綱山の三郎、大山の伯
耆坊、赤山の豊前坊、白峯の相模坊、大峯の前鬼で、こ
れらはいずれも金毘羅の使者といふことになつてゐる。
とまれ往昔は、尺間は天狗の住まふ山であり、各地に祀
られる愛宕社はそれぞれ天狗の住家であつて、分祖して
住民の生活を守る塔でもあつた。惟治と春好が修したと
いふ飯綱、愛宕の法は結果的には何の効能もたらさな
かつたが、畿國の謀略としては興味のある史実であらう。
古市地区或地の愛宕社、それは浸滅した遺址の一つにす
ぎないが、私はそこに祖先たちが經營した地域の歴史を
描いて見るのである。

研究

梅牟礼時代に於ける

佐伯氏の居館について

会員 小野 英 治

梅牟礼時代の佐伯氏の居館、つまり十代惟治、十四代
惟定当時の居館の位置は、今日迄不明となつてゐる。そ
れほどのような理由によるのであらうか。やはり、佐伯
氏から毛利氏と江戸時代領主の変わったことが、佐伯氏時
代の事蹟を不明のものとしてゐる最大の原因であらう。

(おわり)

とかく新領主は旧領主への領民の追慕的なもの及び、一切
これと認めず、これの破壊に努めるものゝである。この事
は佐伯氏時代の古文書類が皆無に等しい事からよくこ
れを物語つてゐると思ふ。

だから、今日佐伯氏の居館址と推定するとすれば、地
名、位置、伝承、参考文献等によるなければならぬ。
第一に地名であるが、梅牟礼城周辺に居館を物語る地
名が不思議とない。屋形、夕テ(館)等があげればよいの
であるが、これがない。

次に位置から居館を推定するとすれば、それは、先づ
梅牟礼城に近接してあり、一応の要害であり、当時に於
ける交通の便、生活の便がよい点等の条件を兼備してい
る地ということになります。

次に伝承ですが、居館の場所を示す伝説が残念なこと
にないようです。龍護寺に別館があつたとか、古市に城
下町があつたとかの程度です。

最後は参考文献となりませんが、前に記したように
直接の古文書がありませんから、江戸時代に書かれた軍
記物、地誌類という事になります。これも居館について
触れておりません。

あくまで参考的なもので
すが、以上を各方面
から考察、居館址を推
定してゐる事にいたし
ます。

大分県立舞鶴高校地
名研究グループ協同執
算による『地名調査』
によれば、古市を市場
集落と見て、館址は旧

